

かささぎ通信 第116号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 7月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

「二〇二二年六月「森三郎の作品を読む会」では、「お染」(『赤い鳥』1932.12)と「向かふのお寺のお駒さん」(少国民文芸選『かささぎ物語』[1942.8] 帝国教育会出版部)の読み比べをしました。

今回の『赤い鳥』所収の「お染」と、少国民文芸選『かささぎ物語』所収の「向かふのお寺のお駒さん」は、タイトルの違う同じ話です。

おじいさんとおばあさんが住む家の傍らの竹やぶにいたずらなムジナが住んでいます。ある夏の晩、二人の孫の「お染」に化けたムジナは足の裏にできたおできを治す膏薬をもらいにやって来ます。おじいさんおばあさんは本当のお染なのか、ムジナなのか半信半疑ながら、お染が小さい時に歌っていた「向うのお寺のお夏さん」の歌を上手に歌うのを聞いて、安心して膏薬を貼ってやります。その後、本当の孫の「お染」がやって来て、さっきの娘はムジナだったのだと分かります。

三人は、いたずらなムジナを罫を掛けて捕まえようと相談します。しかし、おじいさんの好物のアケビをお礼に置いていったムジナの気持を「かわいいところもある」と、笑ってゆるしてやります。

この話について「刈谷ホームニュース」(1994[平成6]・9.17)で勝尾金弥氏は新美南吉の「ごんぎつね」と比較しています。

三郎さんの童話「お染」は、娘に化けたムジナが、本物の娘がもう忘れてしまった歌を歌ったり、おできにつけてもらったこう薬のお礼にアケビを置いていたりします。人間とムジナとが、疑いはしても通じ合えるものと肯定されています。南吉の「ごんぎつね」では、人間と擬人化されたキツネとの心は通じ合えるものなのだろうか、読者に問題提起されています。

確かに森三郎の童話では、普段は人間をからかったりいたずらしたりする動物が、人間に助けを求めてくる場面がいくつかありました。「目ぐすり」(『赤い鳥』1932.3)でも、同様の場面がありました。キツネ母子はおじいさんの情け深いことを頼みに、目薬をもらおうとしました。

おじいさんの方も騙されると分かりながら、約束を守ります。キツネはおじいさんの家の裏口に、春はタケノコ、秋は栗やマツタケを届けます。おじいさんも油菓子やがんどきなどをそつと置いてやります。しかし面白いのは、動物たちが、この人間なら許してくれる、助けてくれるという点をちゃんと観察して、いたずらをしていると思われる点です。三郎作品の滑稽・笑いの一面がここにも出ていて、三郎さんが楽しんで書いているなど想像できます。

今回読み比べた二作のうち「向かふのお寺のお駒さん」は、お染が歌っていた歌をタイトルにしています。この二作の読み比べはすでに「かささぎ通信」第68号で行っています。今回もう一度読み比べて、『赤い鳥』版の、おじいさんたちが椿の実を拾い集めて、村の油屋へ売りに行くという設定に注目しました。これを受けて話の最後は、うらの椿の木でふくろうが鳴く「トオコン、トオコン」いう声で終わっています。今回、参加者から、刈谷の隣の知立の親戚で椿の実から油を搾って、生活の様々な場面で使っていたという体験談を聞くことができました。三郎さんの周りでも、実際に椿油を絞って使っていたことがあったのかもしれない。また、腫れ物の膿を出す吸い出しの膏薬を子どもの頃に使ったという体験談も出て、「お染」の話の背景で話が盛り上がりました。

「向かふのお寺のお駒さん」(1942年)は通信68号で紹介したように、柳田国男の『野鳥雑記』(1950年)にある「ノリツケホーセ」(ふくろうのこと)の鳴き声で終わっています。同じふくろうの声でも翌日の晴れを印象付けています。ムジナとのやり取りを明るく笑い飛ばし、久しぶりに会った孫と楽しい時を過ごしている雰囲気が出ています。

次回予定 二〇二二年九月九日(金)午後一時半~三時半

(八月は休会)

①読み比べ「赤鬼青鬼」(『赤い鳥』[1933.1]所収)と

「青鬼赤鬼」(『かささぎ物語』[1942.8] 帝国教育会出版部所収)

②「蘆刈(あしかり)」(『うぐいすの謡』[1943.8]所収)